

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 第128集

山 林 遺 跡

平成12年度 (一) 細江浜北線住宅地関連公共施設整備促進
(道路改良特)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 第128集

山 林 遺 跡

平成12年度 (一) 細江浜北線住宅宅地関連公共施設整備促進
(道路改良特)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

浜北市平口に所在する山林遺跡の調査は、浜北新都市開発に関連する細江浜北線の改良工事に伴い実施された発掘調査である。浜北市教育委員会による浜北新都市開発に伴う発掘調査では、三方原台地上で積石塚古墳を中心として構成された二本ヶ谷古墳群や埴輪を有する前方後円墳を中心とする辺田平古墳群など、数多くの古墳が調査された。また、内野地区には、三角縁神獣鏡・銅鏡など豊富な副葬品が出土したことで著名な赤門上古墳など数多くの古墳が築かれており、浜松市から浜北市にかけての三方原台地は県内で有数の古墳密集地帯である。

しかし、平口・内野地区では、三方原台地上で古墳の調査は幾度か実施されているものの、平野部での調査がほとんど実施されたことがなかった。この地区では山林遺跡が昭和59年の浜名高等学校史学部の調査によって弥生時代から近世に至る複合遺跡であることが断片的に周知されていただけであり、平野部の遺跡について様相が明らかではなかった。

今回の調査では、遺構は確認できなかったが、奈良時代の土師器を中心とした遺物が出土し、遺跡が弥生時代後期に形成され、平安時代を除いて江戸時代まで居住域となっていたことが予測できた。また、出土した奈良時代の土器が多いことから弥生時代とともに山林遺跡が奈良時代も盛行したことが予測できる。今次の調査は橋脚部分という狭い範囲を対象としているため、山林遺跡の外周の一部を調査したに過ぎず、遺跡本来の性格を知ることはできなかった。今後、集落の範囲や状況など山林遺跡の性格が明らかになることを期待する。

山林遺跡の調査および本書の作成にあたっては、静岡県浜松土木事務所ならびに浜北市教育委員会をはじめとする関係機関各位にご理解、ご協力をいただいた。また、調査にあたっては、多くの方々にご指導・ご助言をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。最後に、調査に従事した調査員・作業員諸氏を労いたい。

平成13年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠



第1図 山林遺跡の位置

例　　言

- 1 本書は、静岡県浜北市平口3115番地ほかに所在する山林遺跡発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は、浜北市教育委員会社会教育課文化財係が実施した試掘調査の結果を受け、平成12年度（一）細江浜北線住宅地関連公共施設整備促進（道路改良特）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県浜松土木事務所から委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成12年10月1日より平成12年11月30日まで実施した。また、資料整理および報告書の作成を平成12年12月1日より平成13年2月28日まで実施した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。
平成12年度（本調査および資料整理・報告書作成）
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事兼総務部長 伊藤友雄
調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長兼調査研究1課長 及川 司
調査研究2課長（発掘調査） 篠原修二 資料課長（整理・報告書） 大石 泉
調査研究員 大谷宏治（調査・整理・報告書担当）
- 4 本書の執筆は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担執筆した。各分担は以下のとおりである。分担が重なる箇所は、文章の最後に文責を記す。
大谷 宏治 第Ⅰ～Ⅲ章、第Ⅳ章第1・2節、第Ⅳ章第3節1～3、第Ⅴ章1・2
本田 祐二（臨時職員） 第Ⅱ章、第Ⅳ章第3節3、第Ⅴ章2
- 5 写真撮影は遺構・遺物とともに大谷が撮影し、図面の清書は大谷と本田が分担して行った。木製品の保存処理は主任調査研究員 西尾太加二が実施した。
- 6 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 7 発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査および報告書の作成にあたっては、当研究所評議員 加藤芳朗先生にご指導を賜りました。また浜北市教育委員会並びに調査地に隣接する土地所有者の方々に格別のご協力を賜りました。さらに、下記の個人にご教示、ご指導賜りました。銘記して深謝いたします。
遠藤喜和 久野正博 佐藤由紀男 佐野聖子 白井秀明 鈴木敏則 鈴木一有 鈴木京太郎
白澤 崇 松井一明
- 9 発掘調査および整理作業参加者
安間一家 伊藤容子 江間徳治 太田貞司 岡田理江 片岡久子 白井秀明 杉山すず代
鈴木勝男 高林明美 田口久子 野末光昭 宮本来内 横田要一

目 次

序

例言

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 位置と環境	1
第Ⅲ章 調査方法と経過	4
第Ⅳ章 調査の成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 1・2区の調査	6
第3節 3・4区の調査	7
1 遺構	7
2 遺物の出土状況	7
3 出土遺物	9
第V章まとめ	18
1 山林遺跡の推定範囲	18
2 山林遺跡の特色	20

挿図目次

- 1 山林遺跡の位置
- 2 山林遺跡の位置と周辺の主な遺跡
- 3 山林遺跡周辺の地質状況図
- 4 山林遺跡調査区配置図
- 5 山林遺跡基本土層図
- 6 1・2区完掘状況平面図および土層図
- 7 3・4区出土土器分布図
- 8 3・4区完掘状況平面図および土層図
- 9 3区出土土器実測図①
- 10 3区出土土器実測図②
- 11 3・4区出土土器実測図
- 12 3区出土木製品実測図①
- 13 3区出土木製品実測図②
- 14 第1次調査平面図および土層図
- 15 第1次調査出土弥生土器
- 16 山林遺跡集落想定図

挿表目次

- 第1表 出土土器観察表

図版目次

- 1 山林遺跡調査前全景（南西より）
- 2 1区完掘状況（西より）
- 3 2区完掘状況（西より）
- 2 1 3区遺物出土状況（東より）
- 2 3区完掘状況（東より）
- 3 4区遺物出土状況（東より）
- 4 4区完掘状況（東より）
- 3 1 1区北壁土層堆積状況（南より）
- 2 2区南壁土層堆積状況（北より）
- 3 3区東壁南側土層堆積状況（西より）
- 4 4区東壁土層堆積状況（西より）
- 4 1 3・4区出土弥生土器・土師器
- 2 3・4区出土須恵器・土師器
- 5 1 3・4区出土土師器
- 2 3・4区出土山茶碗・かわらけ
- 6 1 3・4区出土土師器・山茶碗
- 2 3区出土木製品①（杭）
- 7 3区出土木製品②（用途不明品）

第Ⅰ章 調査に至る経緯

山林遺跡の発掘調査は、平成12年度（一）細江浜北線住宅地開発公共施設整備促進（道路改良特）工事に伴い実施した。遺跡の付近では、浜北新都市開発において住宅宅地の整備を中心として継続的な開発が計画・実施され、この一環として細江浜北線（県道391号線）が改良・整備されることになった。

山林遺跡は周知の遺跡として登録されており、過去に1度の発掘調査（第1次調査）が実施されている。その結果、弥生時代から中・近世に及ぶ集落址と考えられている。

この道路敷設工事によって遺跡の工事予定箇所が破壊・消滅することから、予定地内の遺跡の取り扱いについて、県教育委員会文化課と浜北市教育委員会との協議が行われた。協議後、浜北市教育委員会による試掘調査が実施され、工事予定地内の遺跡の範囲は東西約100mであることが判明した。しかし、道路敷設工事に伴い遺跡が破壊される範囲は、橋脚の建設される4箇所であり、それ以外の部分は現状保存されることから、この橋脚部分のみを発掘調査することになった。発掘調査は県教育委員会文化課を指導機関とし、当研究所が静岡県浜松土木事務所より委託を受けて実施することになった。

調査は、試掘調査を実施した浜北市教育委員会の調査資料の提供を受け、平成12年10月1日より実施した。

第Ⅱ章 位置と環境

地理的環境 山林遺跡の所在する浜北市は静岡県の西部に位置し、南は浜松市、西は浜松市・引佐町、北は天竜市、東は天竜川を挟んで磐田市・豊岡村と接している。浜北市の地形を分類すると沖積平野、北部山地・丘陵、三方原台地、河岸段丘に区分することができる。山林遺跡はこのうち天竜川が形成した沖積地に位置している（第1・3図）。

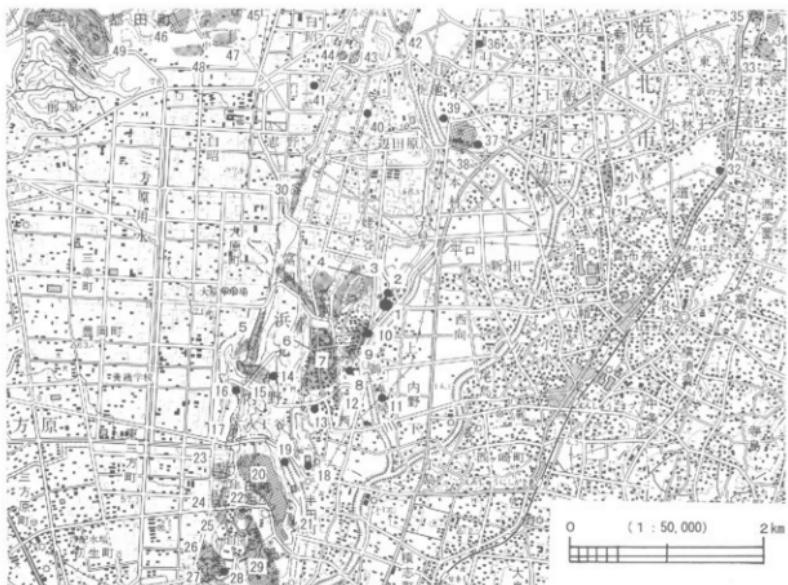
遠江を東西に分断する天竜川は近代以降の治水事業が進んだ結果、天竜市鹿島付近で東に屈曲し、磐田原台地に近接する川筋を流れているが、それ以前は沖積平野を蛇行し、時としてその本流は現在のように磐田原台地側を流れたり、三方原台地側を流れたりと幾度となく流路を変更した。その名残は現在の地形にも明瞭に刻まれており、天竜川と人間との葛藤が文献にも記されている。

山林遺跡は、天竜川の旧本流と考えられている馬込川の支流の一つである御陣屋川の右岸、三方原台地の崖下に位置しており、浜北市が発行した『震災地形分類図』によれば、小規模扇状地（微高地）と氾濫原の境界に立地する（第3図）。

（大谷）

歴史的環境 旧石器時代では、根堅地区に所在する根堅遺跡で、1～2万年前とされる2体の人骨とともに動物骨などが出土しており、この人骨は「浜北人」と名付けられている。このほかに、梶池遺跡（39）があり細石核・石核が出土している。縄文時代では、堀谷洞窟遺跡・向野I・II遺跡・大屋敷I・II遺跡（早期・中期）、新屋遺跡、梶池遺跡（中期・39）など、北部の山麓や丘陵、台地上に位置している。

山林遺跡（1）の初現時期である弥生時代においては、丘陵・微高地上に遺跡が確認されている。山林遺跡のほかには芝本・東原遺跡（33～35）、堀谷洞窟遺跡、土取遺跡、舟岡山遺跡（18）などが周知されているが、本格的に発掘調査が実施されている芝本・東原遺跡以外は断片的にその様相を窺うことができるのみである。於呂・新原地区的芝本・東原遺跡では、多くの竪穴住居や方形周溝墓が確認されており、天竜川平野北部の、弥生時代の標識的な遺跡である。



1 山林遺跡	11 内野小西遺跡	21 寺下遺跡	31 新原遺跡	41 志野遺跡
2 巳ノ山古墳	12 神明社上古墳群	22 半田山W古墳	32 天宝堤	42 天神山遺跡
3 辻田平古墳群	13 観音ソラバ古墳	23 半田山G古墳群	33 東原遺跡D地点	43 桶池古墳群
4 二本ヶ谷古墳群	14 荘地石遺跡	24 半田山H古墳群	34 東原遺跡C地点	44 志野古墳群
5 富岡古墳群	15 八丁谷遺跡	25 半田山A古墳群	35 東原遺跡B地点	45 沢上I遺跡
6 太田坊古墳群	16 佐左衛門山古墳群	26 半田山B古墳群	36 野口遺跡	46 前平遺跡
7 権現平山古墳群	17 内野西古墳群	27 半田山C古墳群	37 清水遺跡	47 沢上II遺跡
8 赤門上古墳	18 舟岡山遺跡	28 有玉古墳跡	38 男池遺跡	48 前原IV遺跡
9 内野上古墳群	19 荘地石遺跡	29 半田山D古墳群	39 桶池遺跡	49 谷上遺跡
10 内野御陣屋跡	20 下池遺跡群	30 雄ヶ谷古墳群	40 辻田原古墳	

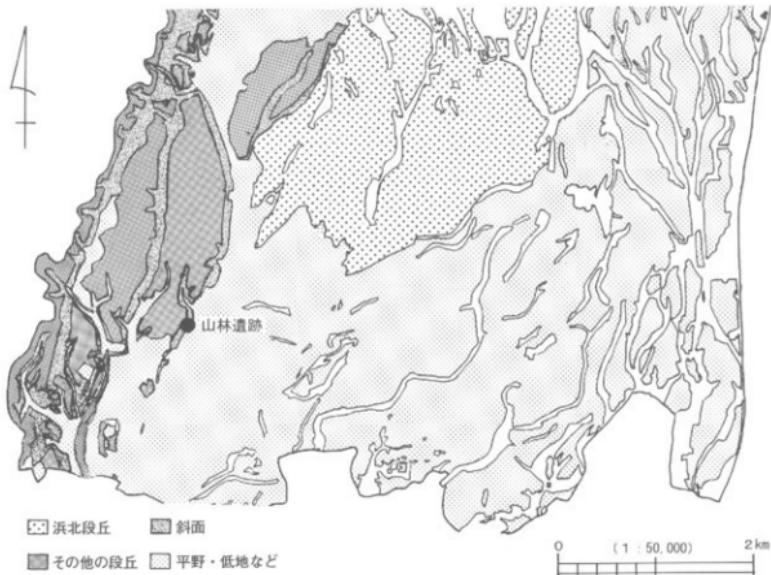
第2図 山林遺跡の位置と周辺の主な遺跡（国土地理院1：50,000「磐田・浜松」に加筆）

古墳時代前期には、山林遺跡の南約7～800mの三方原台地上に赤門上古墳(全長約56mの前方後円墳、4世紀後半、8)が築造される。古墳時代中期以降、前期と同様に台地上に稻荷山古墳(9)、山の神古墳(9)、権現平山古墳群(7)、辻田平古墳群(3)、二本ヶ谷古墳群(4)などが相次いで築造される。権現平山古墳群は5世紀後半～7世紀前半に築造された群集墳であり、このうち3号墳からは金銅装主頭大刀が出土している。また、辻田平古墳群では5世紀後半～6世紀ごろの古墳20基が発掘調査され、前方後円墳である1号墳からは円筒埴輪などが出土した。

(大谷)

律令体制の成立に伴い、地方支配体制の整備が進み、静岡県西部地域は遠江国として掌握され十郡が置かれた。山林遺跡のある浜北市には庵玉郡・磐田郡・長田郡(709年に長上・長下の二郡に分割)の三郡が置かれたと考えられている。

古代の天竜川は庵玉河と呼ばれ、たびたび氾濫をくり返していたことは明らかであり、道本に残る天宝堤(32)は奈良時代に修築された堤防と伝承される。天竜川により形成された段丘上では古代の遺物が採集されているが、清水遺跡(37)や東原遺跡D地点(33)などのほかは未調査の遺跡が多く、郡衙や集落の様相は明らかではない。また、浜北市北部の丘陵地帯で、窯の操業が開始された時期でもある。



第3図 山林遺跡周辺の地質状況図（浜北市「震災地形分類図」（1981）をもとに作成）

吉名1・5・6号窯、大屋敷1・5号窯が調査され、灰釉陶器や山茶碗、瓦などを生産していたことが判明している。この他に新池・諏訪・土取・樅池などでも窯跡の存在が確認されており、浜北市北部の宮口地区は平安時代を中心とし、奈良時代から中世まで操業されていた大規模な窯業生産地であった。

平安時代後期以降、各地で荘園が成立した。遠江国でも伊勢神宮の荘園である御園、御厨が設定されていたことが判明している。その一つが浜北市美蘭に置かれたとされる「美蘭御厨」で、地名にその名を残している。また、内野地区には内野神明宮が鎮座することながら、「宇治乃御厨」の地に比定する説があるが確証は得られていない。この時期の遺跡の様相は明らかではないが、内野神明宮の東側に所在する内野小西遺跡(11)では中世に比定される遺物が採集されている。

近世になると、山林遺跡周辺は旗本近藤氏の領地となる。近藤氏はその所領を一族に分知し、井伊谷・金指・氣賀・大谷・石岡の五近藤が成立した。山林遺跡より南へ約200 m、御陣屋川の右岸の内野御陣屋跡(10)は、大谷村に陣屋を置き、現在の三ヶ日町の諸村を支配していた大谷近藤氏が、1839年内野の地に陣屋を移した時の屋敷跡と推定され、これ以降大谷近藤氏は内野近藤氏と称される。（本田）

既往の調査 昭和59(1984)年に当時、静岡県立浜名高校史学部OBであった松井一明・木村弘之氏らにより試掘調査(第1次調査)が実施されている。この調査において、弥生土器、須恵器、土師器、山茶碗、陶磁器などが出土しており、山林遺跡が弥生時代から中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。この時の成果の一部が『伎倆』第13号および『浜北市史』通史上巻、173～174頁に掲載されている。成果はまとめにて記述する。また、発掘調査ではないが、山林遺跡を南北に貫く用水路の改良工事中に完形に近い弥生土器が出土したということである。

（大谷）

第Ⅲ章 調査の方法と経過

調査の方法 調査は橋脚建設予定部分の東西約16.5m、南北15.5mの範囲4箇所を調査区として実施した。橋脚は道路工事用地内の東側と西側に2箇所ずつ建設される予定であり、東側の北側の調査区を1区、南側を2区とし、西側の北側を3区、南側を4区とした。

調査の経過 調査は10月1日より開始した。まず、調査範囲の草木除去を行った後で、3・4区より重機による盛土除去を開始した。その後、人力により包含層の掘り下げを行った。この際まず包含層の厚さを確認するため、排水をかねて調査区の周囲に溝を掘削した。これにより包含層の厚みは20cm前後であることが確認できたことから、3区より包含層の掘削を行った。4区の包含層の除去が終了した時点で、測量機器を使用して遺物の取上げを行った。地形測量を実施した後で、包含層の下層に遺構が存在する可能性を考慮して、十字に試掘溝を入れた。この結果、包含層の下部には遺構が存在しないことが明らかになった。3・4区では最終的に遺跡の地質形成過程を調査するため数カ所地山砂礫層まで掘り抜き、当研究所評議員加藤芳朗先生に現地指導を仰いだ。11月6日に3・4区の調査を終了した。

3・4区に統いて11月7日より1・2区の重機による盛土除去を開始した。1区は地山砂礫層直上までコンクリート塊を含む盛土が積載されており、包含層は確認できなかった。2区は包含層を確認し、その層位を人力により掘削し、遺構等の調査をしたものとの遺構・遺物とともに出土しなかったため、基本層序を確認するため数カ所を地山砂礫層まで掘り抜いた。この後測量を行い、調査を11月27日に終了し、30日に現地プレハブ等を撤去し、すべての調査を終了した。



第4図 山林遺跡調査区配置図（浜北市「国土基本図浜北市全域29」に加筆）

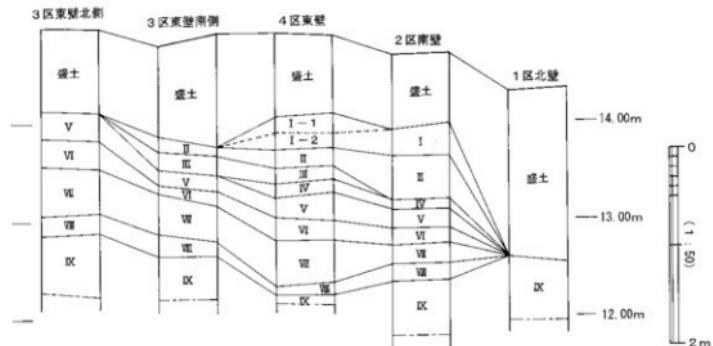
第Ⅳ章 調査の成果

第1節 基本層序

山林遺跡の基本層序は第5図のとおりである。

最上層は昭和60年以降に烟造成のために盛られた盛土である。第Ⅰ層は盛土積載前の旧表土であり、水田耕作土と耕作停止後の堆積物である。第Ⅱ～Ⅳ層は攪拌の痕跡が確認できることから水田であったことが判明する。各層の水田が営まれていた時期は遺物が出土しなかったため明らかではないが、第Ⅴ・Ⅵ層から江戸時代前半に比定できるかわらけが出土したことから近世以降の水田層と考える。第Ⅶ・Ⅷ層は遺物包含層であり、弥生土器、上師器、山茶碗、かわらけなどが包含されるとともに、草などの沼地に繁茂する植物の遺体が大量に含まれていた。第Ⅸ層は当初弥生時代の遺構の存在を想定したが、第Ⅹ層と同様、植物遺体を大量に包含しているが、遺物は出土せず、遺構も確認できない。この層より下層が地山である。第Ⅺ・Ⅻ層は灰白色系の砂疊であり、施玉川や馬込川などの堆積層と考える。

加藤芳郎先生のご教示によれば、今次の発掘調査区における土層の形成過程は、施玉川や馬込川などの洪水によって堆積された第Ⅺ層の上部に、ややよどみが始まり第Ⅹ層が形成される。その後、この地は沼地化し、草などの植物遺体を大量に含む第Ⅸ層が形成された後、山林遺跡で廃棄された土器がこの沼地に流れ込み、調査区周辺で堆積したものと考える。その後、周辺の乾燥化が進み、近世になって水田として利用されたと考えることができる。



- 盛土 旧水田の上に、昭和60年以降に積載された盛土。
I層 黒泥（植物遺体を多量に含む。）……近現代の水田。
I-1層 黒泥（植物遺体を多量に含むC。）……放置された水田？
I-2層 黑褐色シルト……近世末～明治の水田耕作土か？
II層 黒色砂質シルト……近世以前の水田。
III層 黑色砂質シルト……近世以前の水田。
IV層 黑色砂質シルト……近世以前の水田。
V層 黒泥（小縫および植物遺体をやや多く含む。遺物を若干含む。）……遺物包含層。
VI層 黑泥（小縫および植物遺体を多量に含む。遺物を多く含む。）……遺物包含層。
VII層 黑泥（小縫および植物遺体を多量に含む。VI層より柔らかい。）……地山。
VIII層 灰色砂疊（小縫を多量に含む。）……地山。
IX層 灰色砂疊（小縫を多量に含む。しまりあり。）……地山。

第5図 山林遺跡基本土層図

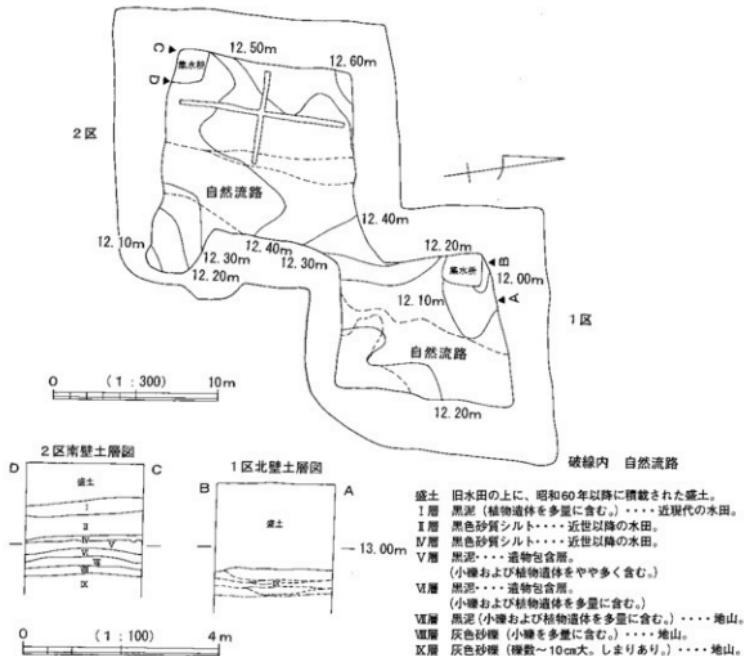
第2節 1・2区の調査

1区は、盛土を除去した結果、調査区北西隅を除いて3・4区における遺物包含層と同一層である第Ⅲ層から地山である第Ⅳ-Ⅴ層までを掘削し積載されていることが判明した。北西隅で確認できた幅1m程度の部分にも、重量によってコンクリートが沈み込んでおり完全に破壊を受けていた。したがって、遺構は確認できなかった。

2区は、盛土を除去したところ、標高12.6～12.8m付近に、3・4区の遺物包含層と同一層位(第VI層)を確認した。この層は3区と比較すると約50～70cm低い位置に形成されている。

調査区の東側半分は、明治時代以降の所産と判断する遺物が出土したため明治以降の旧流路であると判断した。第VI層よりも標高が低く、旧流路の下部は地山であることを確認したため、第VI層の確認できた西半分のみ人力掘削を実施した。第VI層掘削後、遺構確認のため第VII層に十字に試掘溝を掘削したが遺構・遺物ともに出土しなかった。

なお、1・2区とともに、弥生時代から近世の遺物は出土しなかった。



第6図 1・2区完掘状況平面図および土層図

第3節 3・4区の調査

1 遺構

3・4区ともに確認調査で遺物が出土した第VI層上面まで盛土および旧表土を除去した後、第VI層を人力で掘削し下面を精査したが、遺物が出土しただけで、遺構は確認できなかった。遺物取り上げ後、第VII層に十字に試掘溝を掘削し、遺構および遺物の包含状況を確認したが、遺構・遺物とともに出土しなかったことから発掘を終了した。

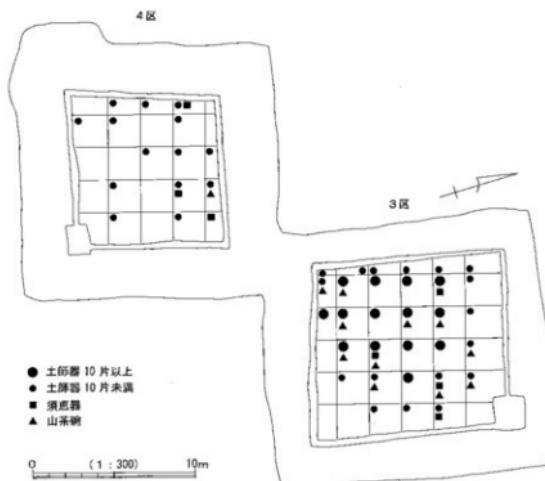
第5・8図に示したように、遺物包含層(第VI層)は第3区が標高13.1～13.8mであり、北側から南側に向かって緩やかに傾斜する。4区は標高12.9～13.1mであり、北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。3区は4区よりやや標高が高く、4区に向かって緩やかに傾斜している状況が判明した。

また、第1次調査の調査成果を参考にすると、山林遺跡の地形が北西側から南東側に向かって傾斜する状況を確認できる。

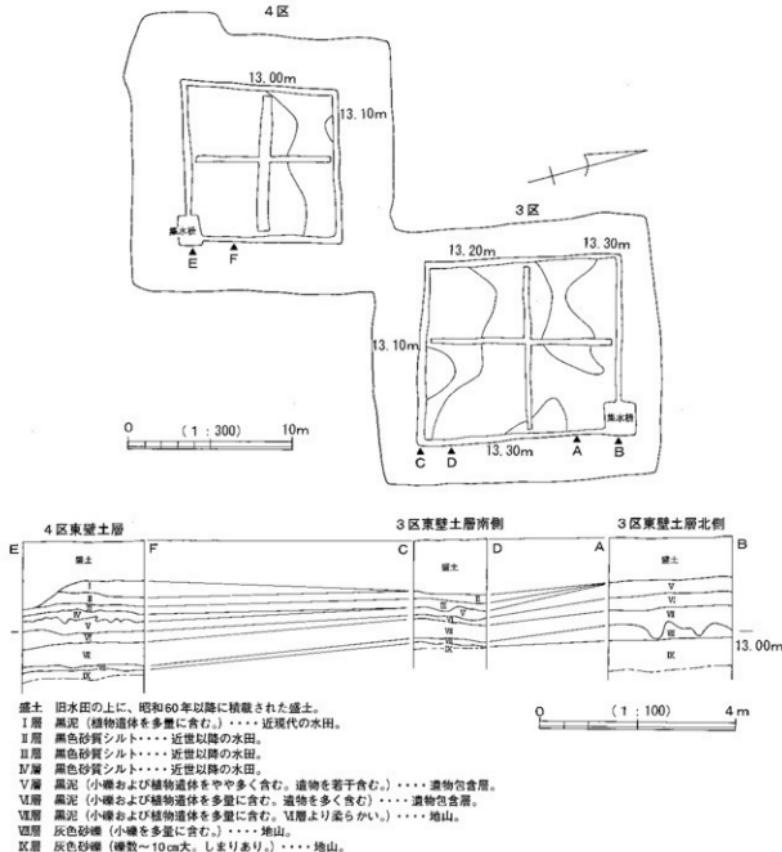
2 遺物の出土状況

3・4区からは弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、山茶碗、かわらけ、木製品が出土しており、弥生時代から江戸時代初期までの遺物を含むが、山林遺跡の約3～5km北に位置する宮口古窯跡群において最も生産が盛んであった灰釉陶器は今次の調査では出土しなかった。

3区の遺物出土状況は、第7図に図示したように発掘区の西側に多く出土し、南東側に行くにしたがい、減少する傾向にある。4区は全体で20片程度出土しただけであり、3区と至近距離にあるが遺物の出土量は圧倒的に少ない。4区における遺物の出土位置は3区よりも多い。この出土状況からは3区の方がより遺跡の中心に近いことが予測できる。



第7図 3・4区出土土器分布図



第8図 3・4区完掘状況平面図および土層図

また、3・4区ともに山茶碗が第Ⅳ層直上から出土しており、遺物が時期をはって層位的に堆積していたわけではない。また、遺物は3・4区に散在する状況を示し、小片化していることを考慮すると、一括投棄されたのではなく、どこかに一括投棄され、御陣屋川などの氾濫や三方原台地から流れ込む雨水によって運ばれた土砂中に含まれていたものが、沼地化していた調査区で堆積したと推定する。これは、調査終了後、土器の接合を行ったが、土師器壺や高盤・盤が若干接合しただけであることが証左となる。

3 出土遺物

3・4区から出土したのは、弥生土器、須恵器、土師器、山茶碗、かわらけ、木製品である。

(1) 土器

3区から出土したものを第9・10図および第11図53～64に、4区から出土したものを第11図65～77に図示した。出土した土器は、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、山茶碗、かわらけである。

弥生土器(第9・11図)

1は菊川式土器の壺頸部破片である。胴上部に突出度の低い突線をめぐらせている。71も菊川式土器であり、口縁部破片である。内面にS字状結節繩紋を巡らせる。2は、弥生土器の壺底部片であり、底部には木葉(葉脈)痕が残存する。

古式土師器(第11図)

69は高杯の脚部破片である。外面にはミガキを施し、内面にはシボリの痕跡が確認できる。脚部は、円錐状に垂下し、端部で外方に屈曲する形状を呈する。元屋敷式段階と推測する。このほかに古墳時代中期と推測する壺・甌の胴部片(65・66・68・72)が出土している。
(大谷)

須恵器(第9・11図)

今回の調査で出土した須恵器の中で、図示することができたのは有台杯および壺の破片3点である。3・73は有台杯で、ともに回転ヘラ削りを施した平底状の底部に断面四角形の高台を貼付している。底部は高台下端よりも上に位置している。体部は底部との境で一度明瞭に屈曲してから立ち上がるものである。4は甌の肩部の破片で、外面には成形時の平行タタキ痕が明瞭に残存している。

有台杯は底部および高台部の形状から、湖西窯出土須恵器分類の蓋付有台杯身A類に分類され、湖西編年第Ⅲ期第3小期後半から第Ⅳ期第3小期前半に比定でき、7世紀後葉から8世紀前半に位置づけられるものである(後藤1995)。

土師器(第9～11図)

古墳時代後期後半～奈良時代にかけての土師器では蓋・杯・鉢・椀・盤・高盤・甌・台付壺などの器種が出土しているものの、いずれも破片であり、その特徴を明確に捉えることは困難である。

67は把手付壺の把手片である可能性が高い。外面にハケメを残す。

5～8は蓋である。5は擬宝珠形のつまみで、基部にハケ調整が施される。6はつまみの下端から天井部の破片で、7・8はつまみと口縁部を欠損している破片である。4点すべてヨコナデを施した後外面に赤彩されているが、7のみ内面にも赤彩されている。

9～12・21は杯である。いずれも底部を欠損する。形状から緩やかに内彎しながら立ち上がるもの(9・11・12)と、外反して外に開きながら立ち上がるものの(10・21)の二種類に区分できる。前者からみていくと、9は口縁端部でわずかに内傾する。12は9と同様、口縁端部でわずかに内傾するが、口唇部が明瞭な平面をなしており、また全体的に造りが丁寧である。10・11・21の口唇部は9・12と相違し、単純な先継りである。

口縁部外面から内面にかけてヨコナデが施されており、体部外面にはヘラケズリが施されたもの(9・10・21)と、ヘラミガキが施されたもの(11)とがある。赤彩については内面のみのもの(12)、外面のみのもの(11)、内外面ともに確認できるもの(9・10・21)がある。

13は鉢である。口縁部が強く外反する形状のものであるが、その他の部分を欠くため詳細は不明である。焼成不良により軟質である。内外面に赤彩されているが、器表面の摩減が顕著であるため、調整を視認することができない。

14は楕である。底部を欠損するためその形態は不明である。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられている。口縁部外面から内面にかけてはヨコナデが施されるが、外面中程に粘土紐巻き上げ痕が明瞭に視認でき、外面下部には指頭圧痕が顕著に残存する粗製の楕である。

15・20・22～26は盤である。いずれも底部の大半を欠損するため、高盤の盤の可能性もあるが区別できないため、盤として一括して扱う。盤は大きさから口径15cm前後の小型のもの(15・16・22)、18cm前後の中型のもの(17～20・23)、21cmを越える大型のもの(24～26)の三種に分類できる。形態については底部から屈曲した後ほぼ垂直に立ち上がるものの(15・17～20・22・23・25・26)と、口縁が外に開き気味に立ち上がるものの(16・24)が確認できる。口縁端部は、15・17・18・20は内傾しているが平面を形成していない。一方、22・23は内傾する平面を呈しており、また23は内面の口唇直下に沈線が施されている。**16・19・24～26**は先細りの形態を呈する。なお、**18**以外は内外面ともに赤彩されている。

27～34・70は高盤である。脚部外面の調整は三種類確認でき、ヘラ削りで面をなすもの(27・28)、ヨコナデを施すもの(29)、ハケを施すもの(30)の三種が確認できる。内面の調整にはヨコナデが用いられているが、27のように接合痕を明瞭に残す粗雑なものもある。**31～34**は脚端部片で、円錐状に垂下した後、脚端部で屈曲し外側に開く形態を呈する。脚端部はヨコナデのち、内外面にハケ調整を行っているもの(31)、内面のみハケ調整が施されるもの(34)、ハケ調整が確認できないもの(32・33)がある。**70**は表面の摩減が著しいため調整等は確認できない。摩減が進んでいる**28・70**を除き、盤部内外面および脚部外面に赤彩が施されている。

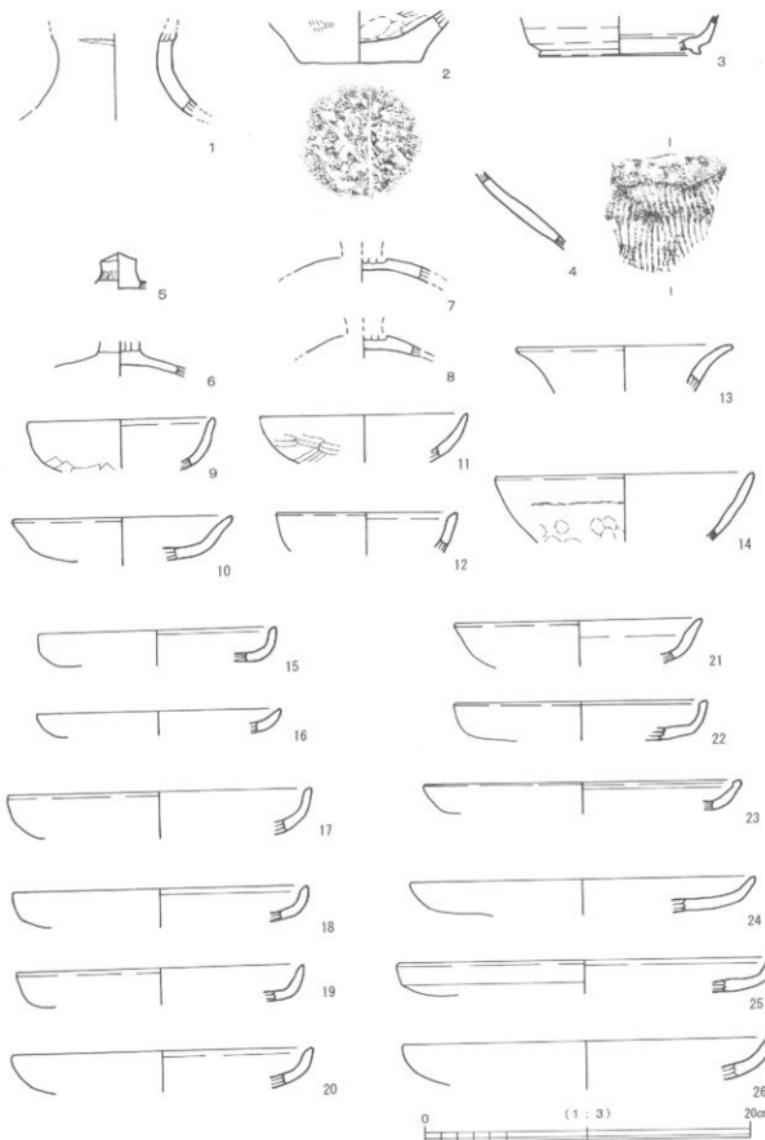
35～52は甕である。口径が復元できたもので20.8～24.6cmを測り、大きさに若干の格差が確認できる。口縁～頸部の断面形態は「く」の字状のもの(36・38・39)、「コ」の字状のもの(37・40・42)がある。**35・41**は欠損しているため頸部の形状は不明であるが、口縁部は屈曲した後外側に大きく開き、口縁部が水平に近くなるものも確認できる。口縁端部はつまみあげられるもの(36・40・41)や、わずかに肥厚するもの(37・38)、丸くおさめられるもの(35・39・42)がある。調整は口縁部の内外面にヨコナデ、外面口縁部下にはハケ調整が施される。

甕の脚部片は最も多く出土しているが、小片であるため図示したのは2点(**49・50**)である。外面にハケ、内面にはナデが施されている。**43・44・51**は台付甕の脚台基部片で、**46～48・52**は脚台部である。いずれも外面にハケ調整が施され、**46・47**の内面には指頭圧痕を明瞭に看取することができる。脚台の端部内面にはいずれも折り返しが確認できる。**45**は甕の平底部分である。今次の調査では平底甕の底部は2点出土している。

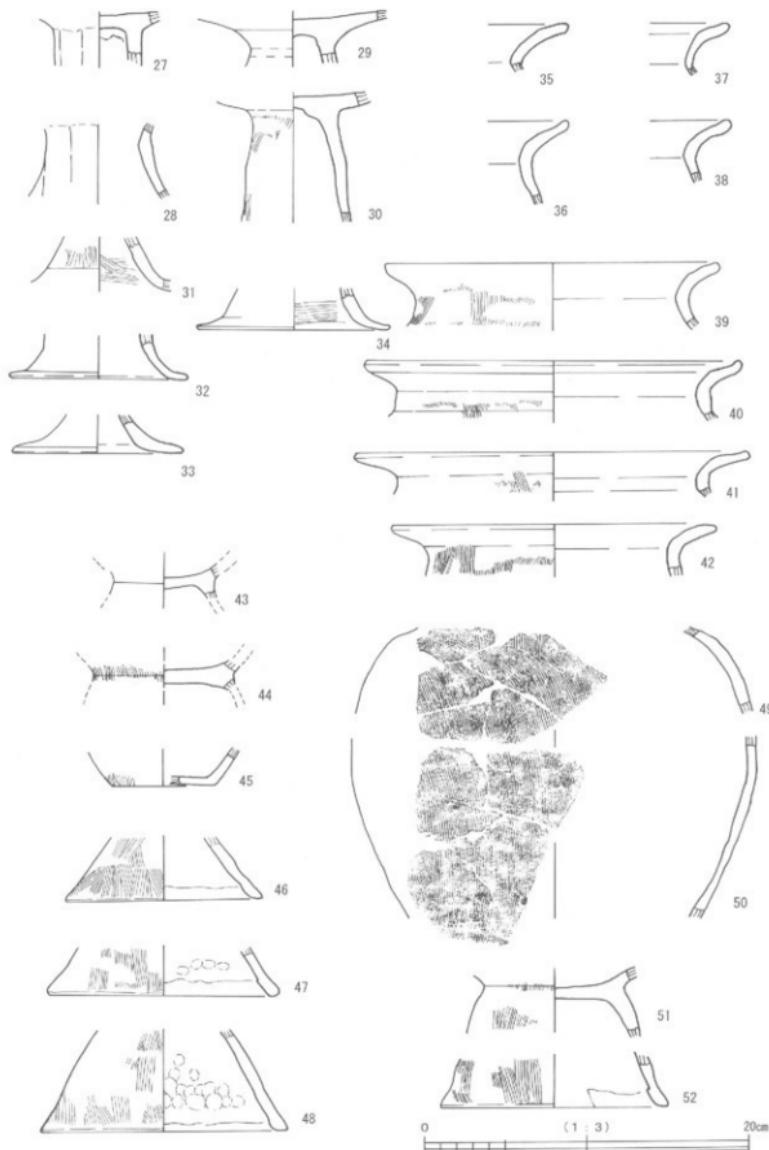
以上、土師器についてみたが、残存状況が悪いため判断材料に乏しく年代の細かな限定は難しいが、高盤の脚部の調整や甕の口縁部の形態から7世紀後半～8世紀に位置づけることが可能である。

山茶碗(第11図)

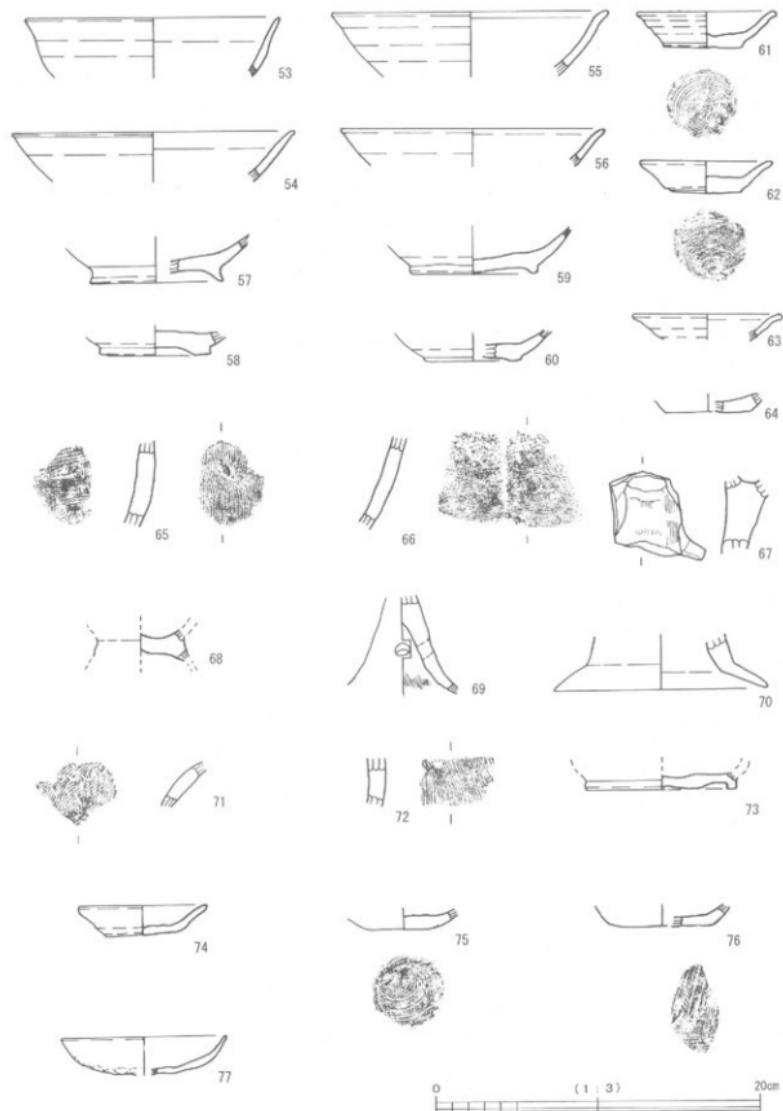
53～60は碗である。**53**は体部から口縁部の破片で、緩やかに内彎しながら立ち上がり口縁部でわずかに外反、器壁の厚さを減じている。**54・56**は直線的に開いて立ち上がる形態のもので、**54**は口縁端部をわずかに外反させている。**55**は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁端部で強く外側に屈曲しており、明瞭な稜線を認めることができる。**57～60**は底部の破片で、**57**は「ハ」の字状に開く爪形高台、**59**はやや低くなった角形高台、**58・60**は扁平な角形高台である。いずれも底部はヨコナデ調整、高台



第9図 3区出土土器実測図①



第10図 3区出土土器実測図②



第11図 3・4区出土土器実測図

は貼付けにより形成しているが、59は貼付け時の調整が粗雑であったため、粘土紐の痕跡が看取できる。

61～63・74は小皿である。底部を欠損する63を除き、いずれも無高台のものである。61は外面にヨコナデによる稜を明瞭に残し、直線的に開いて立ち上がる形態で、口縁端部はわずかに外反する。63は61と類似しているが、口縁端部の外反が顕著である。62・74は緩やかに外反しながら立ち上がる形態のものである。ともにヨコナデを施すが、74は体部下半に手持ちの断続ナデを、底部に不定方向のナデを施している。また、61・62ともに底部は回転糸切離し後、未調整である。57の底部内面には重ね焼きの痕跡が看取できる。

山茶碗の時期は、口縁端部で強く外側に屈曲する55と、爪形高台を有する57は宮口編年の山茶碗Ⅰ期(12世紀前半)、61の小皿はⅡ期(12世紀後半)からⅢ-1期(13世紀前半)、その他の碗や小皿はⅢ-2期(13世紀後半)に位置づけられる形態のものである(松井1989)。

かわらけ(第11図)

64・75～77はかわらけである。残存状況が悪く64・75・76は底部のみの出土である。75・76は底部回転糸切離し後未調整である。77は外面体部下半に指頭圧痕を明瞭に残す粗製のもので、内面にはヘラナデ痕を看取できる。

かわらけについては、底部糸切り離し後、未調整であることから、鎌倉期から戦国期のものであると考える。ただし、77のかわらけについては内部にヘラ状工具の痕跡を確認できることから、近世初頭以降のものであると考えられる(註1)。

(註1)松井一明氏のご教示による。

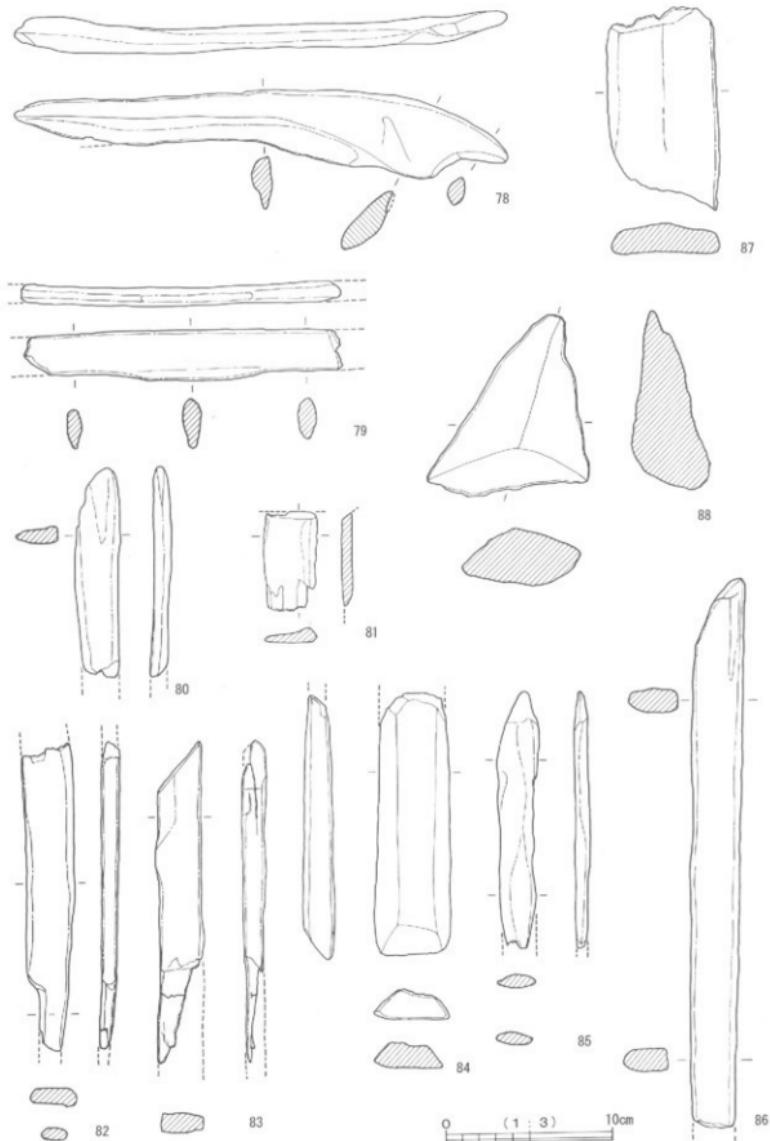
(2)木製品(第12・13図)

3区の遺物包含層から流木とともに、加工痕の確認できる木製品あるいは建築部材が十数点出土している。ただし、89～91が杭と認定できるほかは、用途を特定できない。第12・13図には加工痕の確認できるものすべてを図示した。

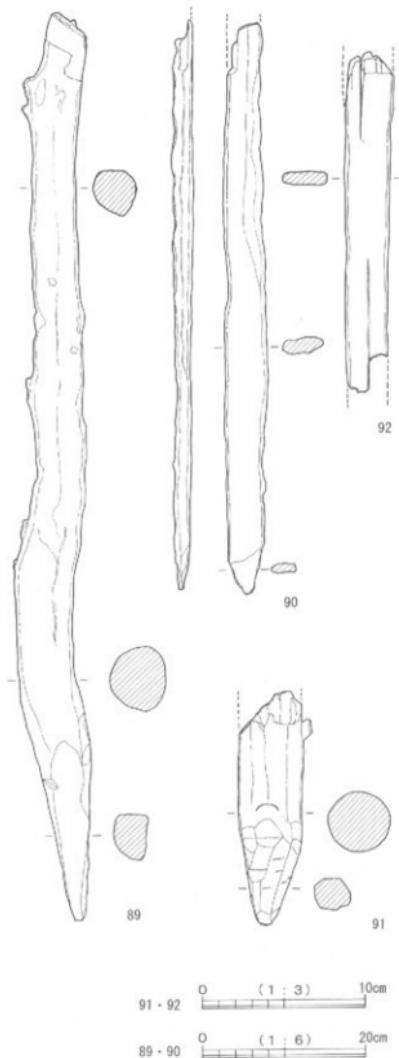
78は残存長30.2cm、最大幅4.8cm、厚さ1.2cmを測る。右側が闊のように加工され、中央は団面上部と比較して下部が三日月状に一段低い。79は、残存長19.6cm、中央部幅3.0cm、左右幅2.6cm、厚さ1.2cmを測る。断面は長楕円形を呈する。中央が左右と比較して緩やかに突出している。用途不明である。80は残存長13.0cm、幅2.8cm、厚さ1.0cmを測る。上部が切先状を呈し、断面も刀のようになる三角形を呈している。ただし、人工的に加工されたのか、腐食により偶然刀状を呈するのか明らかではない。81は残存長6.2cm、幅3.2cm、厚さ1.0cmを測る。上部に斜めに切断した痕跡が確認できるが、この部分以外がすべて欠損しており、用途不明である。

82は残存長18.9cm、幅2.9cm、厚さ1.1cmを測る。下部が撫角闊状に加工されており、あたかも刀形木製品のようである。一段細い部分の幅は0.8cmを測り、先細りする。断面は幅広の部分、幅を狭めた部分とともに長楕円形であり、刀形とは断定できない。83は残存長19.8cm、幅2.8cm、厚さ1.2cmを測る。上部が斜めに切断されている。この角度は約40度であり、切断面は平滑に仕上げられている。断面は長方形を呈している。84は残存長、16.0cm、幅4.6cm、厚さ1.8cmを測る。上部が欠損する以外は良好に残存している。下部および左右が斜めに加工され、平滑に仕上げられている。断面は台形を呈する。上面の平坦面の幅は2.0～2.2cmである。

85はヘラ状の木製品である。上部が竹籠のように尖頭形に加工されており、一部に被熱した痕跡が確認できる。残存長15.8cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmを測る。



第12図 3区出土木製品実測図①



第13図 3区出土木製品実測図②

86は刀状を呈する本製品である。上部が切先状に加工されているが、断面は台形に近い方形であること、先端部分も厚みを減じていないことから、刀形木製品とは断言できない。残存長33.6cm、幅3.0cm、厚さ1.4cmを測る。

87・88は建築材の破片と推測する。

87は上面中央が突出している。裏面は欠損している。残存長12.4cm、幅6.6cm、残存する厚さ1.8cmを測る。

88は中央部に隅角が確認できることから角材の隅部片である可能性が高い。裏面は火を受けて炭化しており、廃材のため焼却処分されたものか、消失した住居の部材を廃棄したものと推測する。

92は細い板状の木材であるが、木製品かどうか判然としない。断面は隅丸の長方形を呈している。

唯一用途の判明するのは杭(89~91)である。樹木を切断し、先端を加工しただけのもの(89・91)と、板状の木材を杭に加工したもの(91)がある。

89は上部が欠損しているが、残存長111.0cmを測る大型品である。杭先より30cmの部分で屈曲しているが、土圧等により屈曲したのではなく、本来このような形状をしていた木材を杭に加工したものである。杭先は四面確認でき、加工は三面に施されている。杭先部分は22.0cmを測る。91は杭先部分のみの破片であり、残存長14.4cm、木材の直径4.0cmを測る、小型品である。杭先は大きく四面確認でき、89と同様三面のみ加工されている。裏面は加工された痕跡は確認できない。杭先は6.6cmを測る。90は上面が加工され平滑に仕上げられている。杭先部分は逆三角形に成形されており、この杭も裏面は加工されていない。残存長69.5cm、幅5.2cm、杭先部長5.5cmを測る。

第1表 出土土器観察表

番号	補遺番号	回数番号	区	種別	器種	口径	底径	高さ	容積	焼成	色調	その他の特徴	
1	9	4-1	3	弥生土器	甕				5.2	やや不良	褐色		
2	9	4-1	3	弥生土器	甕			7.6	3.2	良	暗褐色	底部本葉痕	
3	9	4-2	3	須恵器	有白杯			10	2.4	良	褐色		
4	9	4-2	3	須恵器	甕				2.2	良	褐色	外底赤彩	
5	9	4-2	3	土師器	甕				2.1	やや不良	褐色	外底赤彩	
6	9	4-2	3	土師器	甕				1.5	良	褐色	内外面赤彩	
7	9		3	土師器	甕				1.4	やや不良	褐色	外底赤彩	
8	9		3	土師器	甕				3.1	良	褐色	内外面赤彩	
9	9	4-2	3	土師器	杯	11.6				良	褐色	外底赤彩	
10	9	4-2	3	土師器	杯	13.6	9.4	2.6		良	褐色	外底赤彩	
11	9	4-2	3	土師器	杯	12.8		3		良	褐色	外底赤彩	
12	9		3	土師器	杯	11.3		2.4		良	褐色	内底赤彩	
13	9		3	土師器	杯	13.4		2.8		不良	淡褐色	内外面赤彩、摩滅頭部	
14	9	4-2	3	土師器	甕	16		4.2		良	褐色	内外面赤彩	
15	9		3	土師器	甕	14.7		2.1		やや不良	淡褐色	内外面赤彩	
16	9		3	土師器	甕	15.1		1.4		やや不良	淡褐色	内外面赤彩	
17	9	4-2	3	土師器	甕	18.8		2.7		良	褐色	内外面赤彩	
18	9	4-2	3	土師器	甕	17.8	15.8	2.2		やや不良	淡褐色	内外面赤彩	
19	9	4-2	3	土師器	甕	18.2		2.2		やや不良	淡褐色	内外面赤彩	
20	9		3	土師器	甕	18.6		2.4		良	褐色	内外面赤彩	
21	9		3	土師器	甕	15.4		2.7		やや不良	淡褐色	内外面赤彩	
22	9	4-2	3	土師器	甕	15.7	13.8	2.4		良	褐色	内外面赤彩	
23	9	4-2	3	土師器	甕	19.6	17.1	1.7		良	褐色	内外面赤彩	
24	9	4-2	3	土師器	甕	21.4	19.1	2.2		やや不良	淡褐色	内外面赤彩	
25	9	4-2	3	土師器	甕	23.4	22.6	2		良	褐色	内外面赤彩	
26	9	4-2	3	土師器	甕	22.9		2.5		良	褐色	内外面赤彩	
27	10		3	土師器	高盤			3.3		不良	淡褐色	内外面赤彩、脚部基部S.5	
28	10		3	土師器	高盤			4.7		良	褐色	脚部基部F.5.2	
29	10		3	土師器	高盤			3.5		良	褐色	内外面赤彩、脚部基部S.5.8	
30	10	6-1	3	土師器	高盤			7.9		やや不良	内外面赤彩		
31	10	4-2	3	土師器	高盤			3.4		良	褐色	内外面赤彩	
32	10	4-2	3	土師器	高盤			11		良	褐色	内外面赤彩	
33	10	4-2	3	土師器	高盤			10.6		不良	褐色	内外面赤彩	
34	10	4-2	3	土師器	高盤			12		良	褐色	内外面赤彩	
35	10	5-1	3	土師器	高盤			2.9		良	褐色		
36	10		3	土師器	高盤			5.2		やや不良	褐色		
37	10	5-1	3	土師器	甕			3.3		良	褐色		
38	10		3	土師器	甕			3.8		良	褐色		
39	10	5-1	3	土師器	甕			20.8		良	褐色		
40	10	5-1	3	土師器	甕			23.4		良	褐色		
41	10	5-1	3	土師器	甕			24.6		良	褐色		
42	10	5-1	3	土師器	甕			20.2		良	褐色		
43	10		3	土師器	白付甕			2.2		やや不良			
44	10		3	土師器	白付甕			1.4		良	褐色		
45	10	5-1	3	土師器	甕			6.2	2.5	良	褐色	脚台基部H.6.2	
46	10		3	土師器	白付甕			12.1	3.9	良	褐色	脚台基部H.6.6	
47	10		3	土師器	白付甕			14.3	2.9	良	褐色	黒斑あり	
48	10	5-1	3	土師器	白付甕			15.2	6.3	良	褐色		
49	10	5-1	3	土師器	甕					良	褐色		
50	10	5-1	3	土師器	甕					良	褐色	脚部最大D.25	
51	10	5-1	3	土師器	甕					良	褐色	脚台基部D.8.6	
52	10		3	土師器	甕					良	褐色		
53	11	5-2	3	山茶碗	碗	15.7		3.6		良	褐色	内外面自然釉付着	
54	11	5-2	3	山茶碗	碗	17.4		3		良	褐色		
55	11	5-2	3	山茶碗	碗	17		3.9		良	褐色		
56	11	5-2	3	山茶碗	碗	16.4		2.3		良	褐色		
57	11	5-2	3	山茶碗	柄			8.2	2.2	良	褐色	内面自然釉付着	
58	11	5-2	3	山茶碗	柄			6.8	1.6	良	褐色		
59	11	5-2	3	山茶碗	柄			7.8	3.6	良	褐色		
60	11	5-2	3	山茶碗	柄			6	1.8	良	褐色	内外面自然釉付着	
61	11	5-2	3	山茶碗	小皿	8.4	4.9	2.2		良	褐色	内外面自然釉付着	
62	11	5-2	3	山茶碗	小皿	8.1	4.3	2		良	褐色	内外面自然釉付着	
63	11	5-2	3	山茶碗	小皿	9.3	1.6	1.6		良	褐色		
64	11	5-2	3	かわらけ				5.4	1.2	やや不良	淡褐色		
65	11	4-1	3	土師器	甕					良	褐色		
66	11	4-1	3	土師器	甕					やや不良	淡褐色		
67	11	4-1	3	土師器	把手付甕					良	褐色		
68	11		4	土師器	白付甕				2	不良	淡褐色	脚台基部H.5.3、摩滅頭部	
69	11	4-1	4	土師器	高杯				7	やや不良	褐色	円形のすきし3方向	
70	11	4-2	4	土師器	高盤				11.2	3.3	不良	赤褐色	摩滅頭部
71	11	4-1	4	弥生土器						良	褐色	外面摩滅頭部	
72	11	4-1	4	土師器						良	褐色		
73	11	4-2	4	里窓器	有台杯			9.3	1	良	褐色		
74	11	5-2	4	山茶碗	小皿	7.7	4.5	1.8		良	褐色		
75	11	5-2	4	かわらけ					4	1.1	やや不良	淡褐色	
76	11	5-2	4	かわらけ					6.4	1.4	やや不良	淡褐色	
77	11	5-2	4	かわらけ					10.2	2.3	やや不良	褐色	
												内面ヘラナザ痕	

第V章　まとめ

1 山林遺跡の推定範囲

ここでは、今回の調査結果と第1次調査の成果をもとに、山林遺跡の範囲を考えておきたい。

まず、第一次調査の成果では、以下のような成果があった(浜名高史学部1985・87)。

調査の契機は浜名高校史学部が内野地区調査を行うにあたり、遺物整理中に「平口山林」と注記のある弥生土器片があったことから遺跡確認のため試掘調査を行うに至った。調査は、昭和59年7月28日～30日までの3日間実施した。調査対象地は第2次調査よりもやや北側部分(第4図)に、幅2m×長さ10mのトレンチ(第14図)を設定した。

調査を進めるに、トレンチ内において西から東にかけて緩やかな傾斜をもち、地山が御陣屋川方向に落ち込んでいることが確認された。遺構は確認されなかったが、土器はこの傾斜面より多く出土した。層位は耕作土面下より4層確認できたが、弥生土器および須恵器を混在している層が耕作土面下2層まであり、土器の出土状態からみると黒色土と灰色粘土層の間に多くみられるため、遺物包含層は黒色土(2層)である可能性が高く、灰色粘土層は地山であると考えられる。

出土した遺物は第15図に示したように、1～3は欠山様式系の高杯であり、4は菊川様式系の壺である。5・6は壺の底部破片であり、上底を呈する。この他、口縁部に刻みをもつ台付甕の破片などが出土したが、弥生時代後期を廻る資料は出土していない。

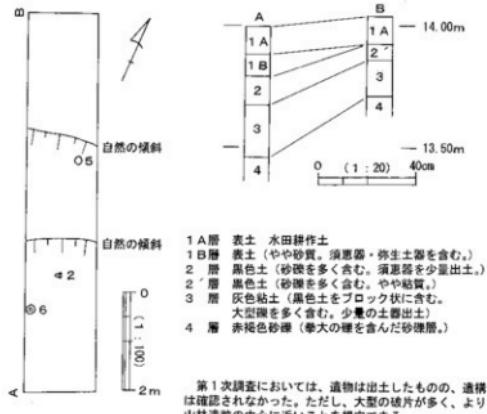
(以上、概略)

上述したように第1次調査の対象地では南東に向かって地形が傾斜していることが確認され、今次の3・4区では南に向かって、また西側調査区から東側調査区に向かって傾斜していることを確認した。したがって、調査区の位置から見ると、平口の集落から御陣屋川に向かって扇形に緩やかに傾斜

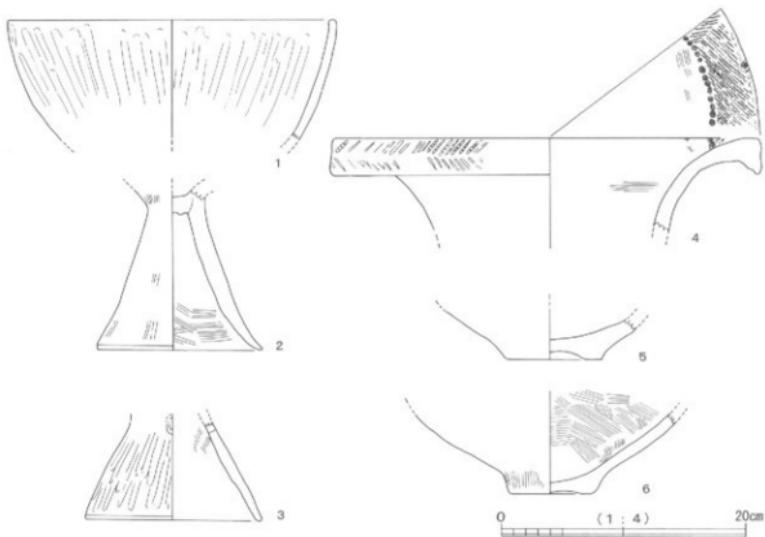
することが判明する。

また、旧流路は現地形に明瞭にその痕跡を留めており、遺跡の東側を北東から南西に向かってS字状に流れていることが想定できる。

さらに、第1・2次調査ともに調査区からは遺構は確認できず、遺物が出土するにとどまることから遺跡の範囲は調査区よりも北側であることが判明する。遺物の出土する数や破片の大きさをみると、第1次調査では大型の土器片が採集されたが、今次の調査ではより小片となったものが出土しており、1・2区では3・4区で遺物包含層である同一層位からも遺物は出土しなかった。また、第1次の調査区のやや北側では弥生土



第14図 第1次調査平面図および土層図
(浜名高史学部1985より再トレース)



第15図 第1次調査出土弥生土器（浜名高史学部1985より改変して再トレース）



第16図 山林遺跡集落域想定図（浜北市「国土基本図浜北市全域29」に加筆）

器の完形品が出土したといわれている。つまり、完形に近い遺物が出土した第1次調査区の方が今次の調査よりも遺跡の中心に近いことが推測できる。

したがって、中心部の調査が全く行われていない現状では明確ではないが、山林遺跡の集落域は標高15～16m以上の部分に当たると推測でき、第16図に示したようにほぼ現在の平口新田の集落が営まれている部分が山林遺跡本来の範囲に近いことが想定できる。そして、第1・2次調査の成果から、山林遺跡の南北約20m前後の範囲に遺物が散布する可能性が高い。

2 山林遺跡の特色

最後に、山林遺跡から出土した土器の様相から遺跡の特色について簡単に触れて報告を終えたい。

出土した弥生土器は小片であるため詳細な検討を行うことはできないが、第1次調査時出土のものを含め、すべて後期後半以降の土器群である。高杯は欠山様式系、壺・甕類は主に菊川様式系であり、天竜川平野北部の様相と合致する。

また、時期を特定することはできないが、元屋敷式階段の古式土師器が出土しており、赤門上古墳が成立した時期と同じ頃山林遺跡が存在していたことは興味深い。また、古墳時代中期・後期の土器も數片であるが出土しており、台地上に古墳を築いた集団と何らかの関係があるものと想定できる。

奈良時代以降、周辺の遺跡の様相も明らかではなく、出土した土器から山林遺跡が奈良時代前半、鎌倉期から近世初頭の時期に機能していたことが判明するが、詳細は不明である。

以上のように今回調査した包含層出土の土器は各時期の遺物のなかにも時期差が確認できるが、弥生時代・古墳時代・古墳時代終末期～奈良時代(7～8世紀)、鎌倉期～戦国期もしくは近世初頭の、おおむね4時期に位置づけることができる。したがって、山林遺跡は弥生時代後期に形成され、古墳時代～奈良時代まで継続して集落が営まれていた可能性が高い。この後、灰釉陶器など平安時代の遺物は確認できることから、この時期は機能していなかった可能性が高く、平安時代末～鎌倉時代になって再び集落として利用された可能性が高い。

(大谷・本田)

<引用・参考文献>

- 後藤建一 1995 「東海東部(静岡)」「須恵器集成図録」第3巻 東日本編。 雄山閣出版
- 賛 元洋 1997 「古代遠江の食膳具」『静岡県考古学研究』29号 静岡県考古学会
- 浜北市発行 1989 「浜北市史」通史 上巻
- 浜北市教育委員会編・発行 1981 「浜北市東原遺跡D地点 浜名高等学校による東原遺跡第1次・第2次発掘調査報告書」
- 浜北市教育委員会編・発行 1989 「明神池運動場内遺跡群」
- 浜北市教育委員会編・発行 2000 「内野古墳群 浜北新都市開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 浜名高校史学部編・発行 1985 「内野の埋蔵文化財調査報告書」「伎倆」第13号別冊
- 浜名高校史学部 1987 「古代・中世の内野・平口 (2) 平口・山林遺跡調査概報」「伎倆」第13号: 4-10
浜名高校史学部
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」「静岡県の窯業遺跡(静岡県内窯業遺跡分布調査報告書)」「静岡県文化財調査報告書第42集」静岡県教育委員会



1 山林遺跡調査前全景（南西より）



2 1区完掘状況（西より）

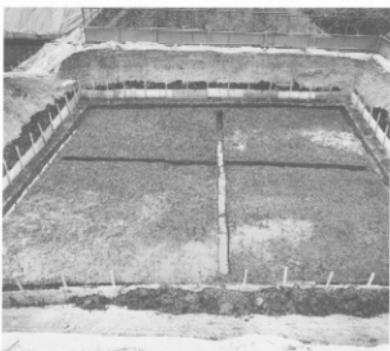


3 2区完掘状況（西より）

図版 2



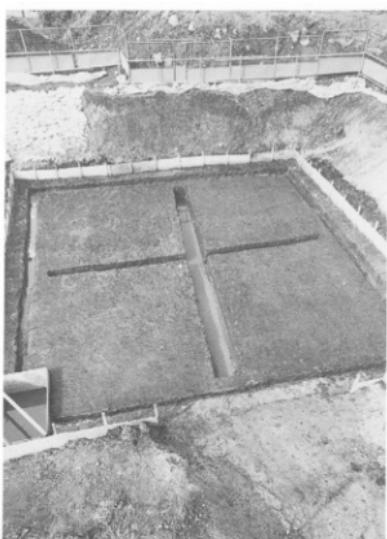
1 3区遺物出土状況（東より）



2 3区完掘状況（東より）



3 4区遺物出土状況（東より）



4 4区完掘状況（東より）



1 1区北壁土層堆積状況（南より）



2 2区南壁土層堆積状況（北より）

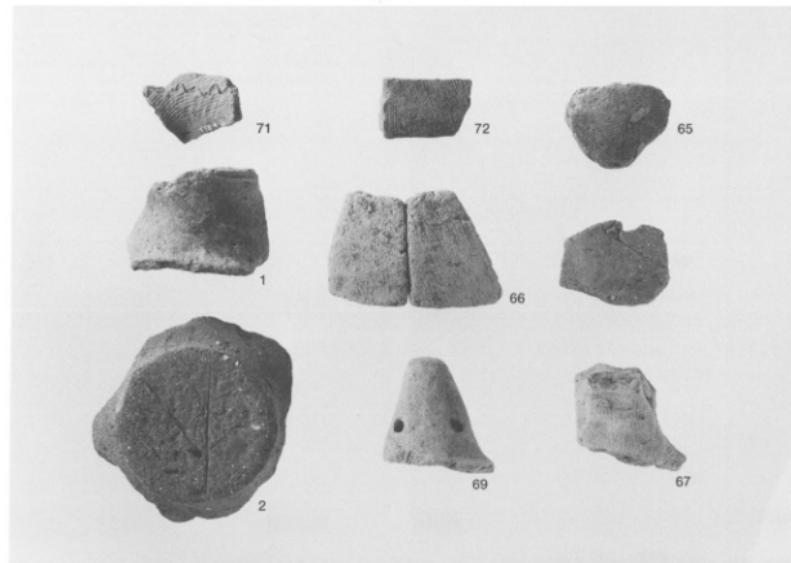


3 3区東壁南側土層堆積状況（西より）

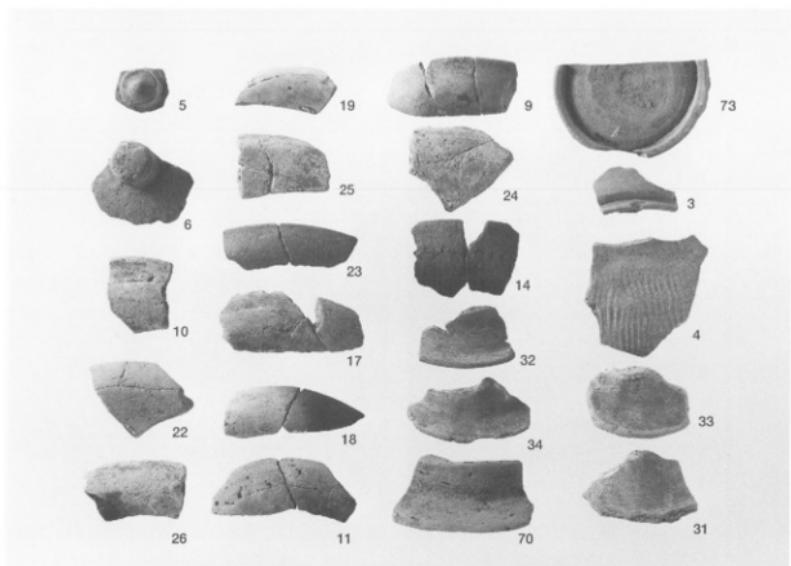


4 4区東壁土層堆積状況（西より）

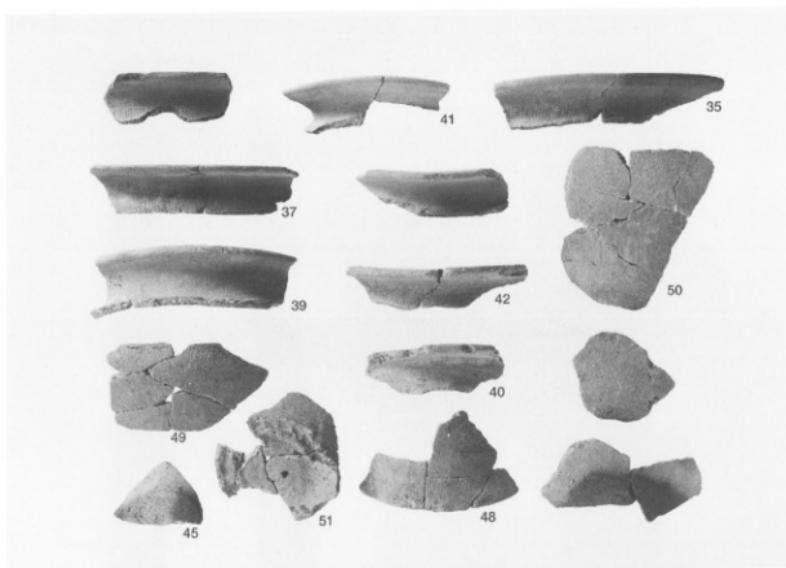
図版 4



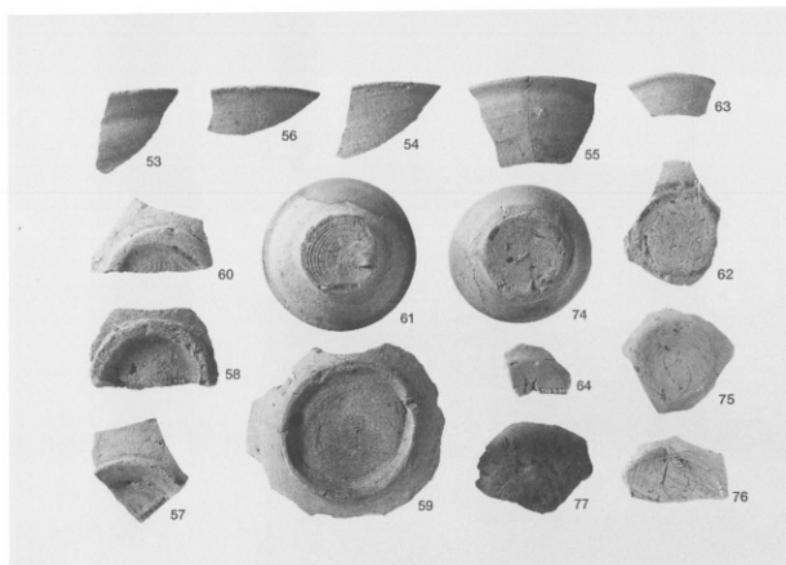
1 3・4区出土弥生土器・土師器



2 3・4区出土須恵器・土師器



1 3・4区出土土師器



2 3・4区出土山茶碗・かわらけ

図版 6



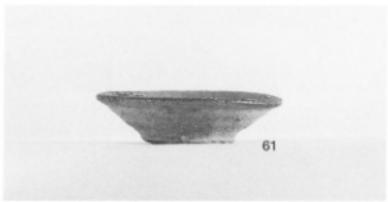
69



30

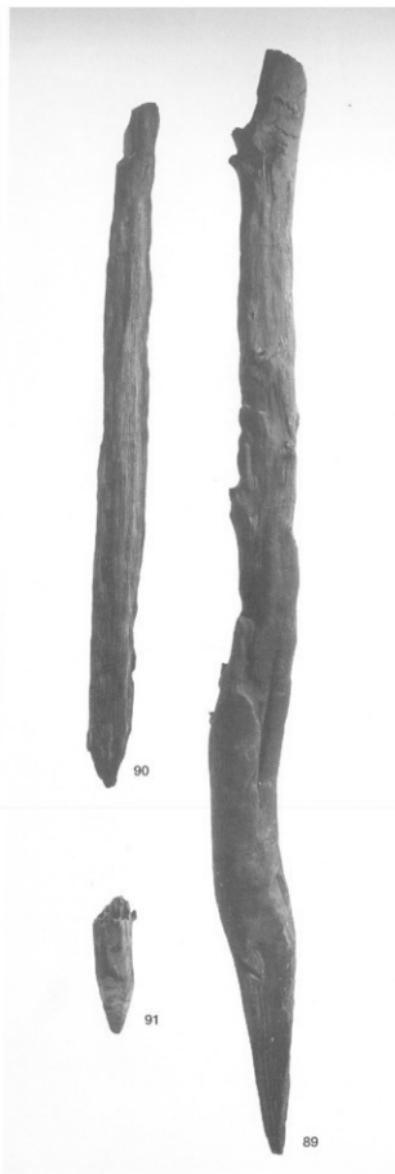


74



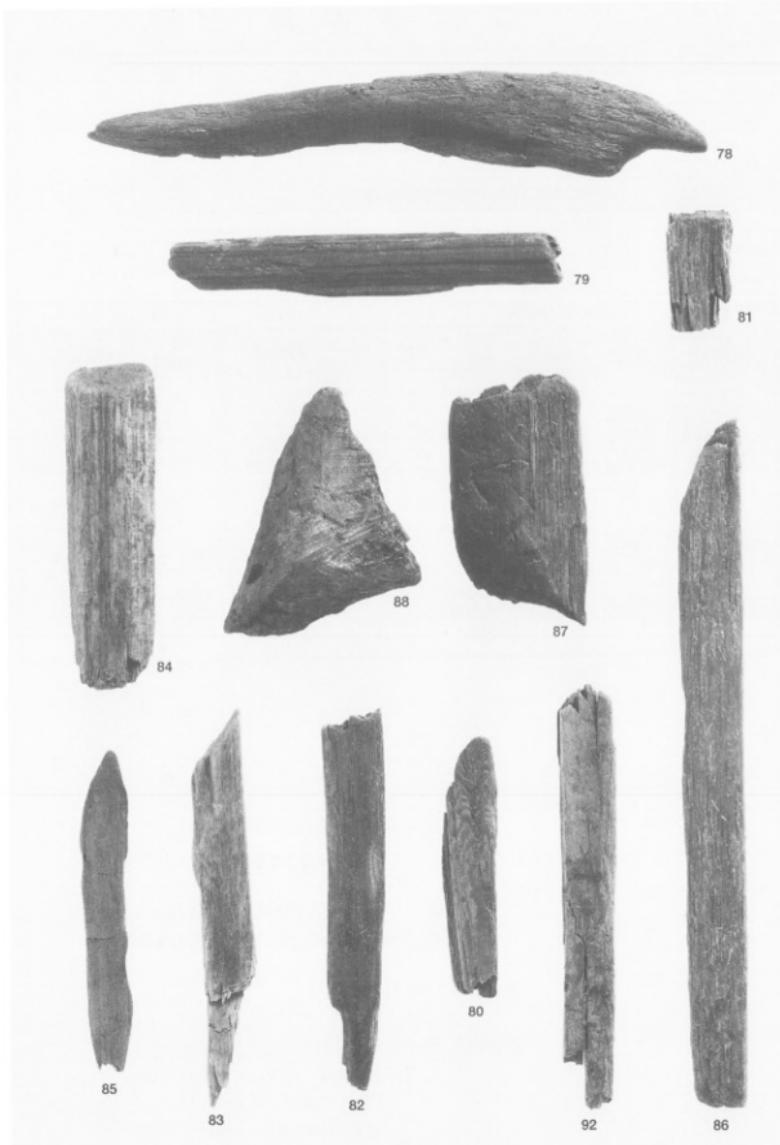
61

1 3・4区出土土師器・山茶碗



89

2 3区出土木製品①(杭)



3区出土木製品②（用途不明品）

報告書抄録

ふりがな	やんばしいせき							
書名	山林遺跡							
副書名	平成12年度（一）細江浜北線住宅宅地開発公共施設整備促進（道路改良特）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第128集							
編著者名	大谷宏治 本田祐二							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東經	調査 期間	調査 面積m ²	調査原因
やんばしいせき 山林遺跡	いづなみけいはん 静岡県 はまさきたじ 浜北市 ひんぱくし 平口3115 他	22218	78	34° 47' 22"	137° 45' 39"	2000/01 ~ 2000/130	575 m ²	平成12年度 (一)細江浜北 線住宅宅地 開発公共施設 整備促進(道 路改良特)工事 に伴う埋蔵文 化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代			主な遺構	主な遺物	特記事項	
山林遺跡	包含層	弥生時代・古墳時代・ 奈良時代・鎌倉時代・ 江戸時代				弥生土器・土師器・ 須恵器・山茶碗・ かわらけ・木製枕		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第128集

山林遺跡

平成12年度（一）細江浜北線住宅宅地開発公共施設整備促進
(道路改良特)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年3月30日発行

編集発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡市谷田23番20号

TEL (054)262-4261(代)

FAX (054)262-4266

印刷所 有限会社 中村印刷